

## 王政復古時代のカントリーハウス・エートス

——“On St James’s Park, As Lately Improved By His Majesty”の一解釈——

岡 田 宏 子

The Ethos of The Country House Poetry during the Restoration  
—A Study of “On St James’s Park, As Lately Improved By His Majesty”—

Hiroko OKADA

英国の内乱は、1660年にチャールズ2世を国王として迎え、王政を復活して終焉し、英国は近代国家への道を歩みだした。ボヘミアのウェンセスラス・ホラーが細密な銅版画で描いた、小さな建物がテムズ川の両岸に密集する17世紀前半とは違った近代都市にロンドンが変身し始めるのは、この歴史的な出来事を経てからであった<sup>1)</sup>。20年にわたる内乱は英国を無秩序と不安定に陥れ、疲れきった人々がこの時最も望んだのは、平和、秩序そして安定であった。

このようなエポック・メイキングな時に、当然チャールズ2世の王位への復活を公的に祝賀する詩は、数多く書かれた。エドモンド・ウォラー（Edmund Waller, 1606–1687）は、そのうちの代表的な詩とみなされているものを国王に捧げているが、本論では、同様なテーマを、国王によるセント・ジェームズ パークの改修にことよせて彼が書いた別のお祝いの一編の詩である、“On St James’s Park, As Lately Improved by His Majesty”（「陛下により最近改修されたセント・ジェームズ パークについて」）をとりあげ、初期スチュアート王朝の用いた地方政治のポリシーの一翼をになっていたカントリーハウス・エートス——ジェームズ1世の頃よりベン・ジョンソンを嚆矢とするカントリー・ハウスという詩群に表わされているイデオロギー——が、1612年のジョンソンの「ペンズハーストに寄せて」（“To Penshurst”）から約半世紀後にどのように変容し、後期スチュアート王朝の記念すべき始まりを祝う詩にどのように表象されているか、究極的には、St James’s Park の改修がどのような王権の表象の装置として機能したかを検討するものである。

詩の分析の前に、まず St James’s Park の “Park” について17世紀の意味を述べる必要がある。それは本来、現在のように「公園」ではなく、鹿などが飼ってある王室の広大なご猟場であったから、厳密に言えば「鹿苑」を意味した。実際、1532年にヘンリー8世が St James’s Park を囲い込んだ頃には、この地に鹿が放たれていたのだ。1658年に公開された St James’s Park の地図によれば、St James’s Park はレンガ塀で囲まれた鹿苑である<sup>2)</sup>。セント・ジェームズという地名は、11世紀に建てられた聖者セント・ジェームズの名前をつけた女性の患者用の救療病院に由来している。

ヘンリー 8 世は、自分の宮廷の高官枢機卿ウルジーを失脚させ、彼の邸宅をとりあげホワイトホール宮殿としたのと前後して、1530年頃その近くの西方の、その頃はペル・メルフィールドと呼ばれていた田園を遠隔の地と交換したり、病人には年金を与えて、離宮及び狩猟場用に手に入れた<sup>3)</sup>。彼は、後にチャールズ 2 世が誕生したセント・ジェームズ宮殿を病院の跡地に建設し、この地からハムステッドまでの間で狩りに興じたのだ。

その後、エリザベス 1 世やジェームズ 1 世もこの地で狩りをし、ジェームズ 1 世は、結び目模様の庭園とワニや珍しい動物を集めた動物園を作った。散歩道や彫刻のある果樹園もあり、チャールズ 1 世は、フランス人の造園家モレ兄弟に刺繍花壇をつくらせ、St James's Park の一部を公開した<sup>4)</sup>。この限りでは、この苑も部分的にほんの少しだけ、今の公園の特徴を持っていた。

しかし、内乱の間、共和政府はそれを閉鎖し、苑の木を全部切り倒す命令を出していた。命令は幸い完遂されなかった。けれども、1660年までには、苑は薪のために木は切られていたし、長期間手入れされなかったため荒れ放題であった。セント・ジェームズ宮殿のロイヤル・チャペルですら、ステンド・グラスは壊され、オルガンは運び出されるなど、議会派軍の狼藉の跡は激しかったのである。

チャールズ 2 世は、少年時代から 16、7 年もの長い亡命生活を大陸で送っていた。父や祖父とは違って真の国際的経験をもち、フランスのヴェルサイユ宮殿や、政府の高官がもつバリの大邸宅が、どのように絶対王政の権力の表象であったかを具に知っていて、荒廃した St James's Park の改修に、父や祖父を凌ぐ大きなスケールで乗り出した。それは彼が 1660 年の 5 月に英国へ帰って以来間もない、その年の秋のことであった。それには複雑な経緯があり、王権の存在の主張は目にみえるかたちで早期に行われねばならなかった。王政復古へ至った政治情勢は確かに決して容易なものではなかったからであった。

護国卿のオリヴァー・クロムウェルの息子、リチャードが亡父より継承した職を早くに辞して、共和制が瓦解した後、王党派の結集はままならず、議会派軍のスコットランド司令官のジョージ・マンクにより 1660 年 2 月に長期議会が再開されたのが、チャールズ 2 世を迎える転回点であった。その後、同年 4 月に長期議会は解散し、仮議会が招集され、貴族院も復活し、地方ジェントリやロンドン商人の多くがこの動きに協力し、5 月の末にチャールズ 2 世はドーヴァーで、歓呼の声で大歓迎されたのであった。フランス人の造園家兄弟モレを使つての、王権の所在するホワイトホール宮殿のすぐ西にある St James's Park の改修着手は、その規模において、また、当時流行りだした Park への関心という上層階級の心理にもアピールしやすい時代の先端の企てであった<sup>5)</sup>。

スチュアート朝初期に盛んであった整形庭園に飽きた上層階級は、17 世紀の半ば以後になると、屋敷に庭園を付随的に造るのではなく、Park を選んでから屋敷の位置を決めるといふ、従来とは異なった眺望重視の美学的志向へ傾いてきた。凝った庭園の造園よりは、Park のそれの方が安価で簡単であったことも、そのような庭園趣味の変化の一因であった。内乱の間、大陸へ亡命していた土地所有者達は、新しいアイディアをもって英国へ帰り、新しい文化の潮流が生まれようとしていた。その一人である王政復古時代のヴァーチュオーソ、ジョン・イヴリン (John Evelyn, 1620-1706) は、屋敷を新築する友達の Park の物色を手伝った楽しさを日記に記している<sup>6)</sup>。

詩人ウォラーは、1660 年に、セント・ジェームズ パークの改修が始まるや否や「陛下

により最近改修されたセント・ジェームズ パークについて」(以下「改修されたセント・ジェームズ パークについて」と言及する)を書いた。彼自身造園への造詣が深かったため、この詩のテーマは彼に相応しかった。とはいえ、事情があって、この詩を捧げられた当事者である国王は、必ずしもこのお祝いの作を快く受け入れなかったらしい。

ウォラーは政治的には王党派であり、チャールズ1世、その王妃や宮廷人達へ数々の賛辞の詩を捧げ、一度は大陸へ亡命するが、革命政府に許されて帰国し、貿易及び航海委員会の職を得てクロムウェルに近い高官の一人となった。1655年には海軍の勝利を祝って、母方の従兄にあたるクロムウェルに対して「彼が王冠を受けるべきである」という著しく変節の結論で結ばれる「A Panegyrick To My Lord Protector」(「護国卿への賞賛の詩」)を出版し、王党派の人々から痛烈な攻撃を浴びた<sup>7)</sup>。この詩の滑らかで美しい言語表現の背後に潜む、王党派を切り崩しかねない政治的危険性に、王党派の大立て者、エドワード・ハイドは肝を冷やした。

チャールズ2世はこの詩を意識して、ウォラーの身替わりの速さに次のような皮肉なコメントをした。ウォラーがクロムウェルのために書いた詩は、自分に捧げられたチャールズ2世の治世の始まりを言祝ぐ「改修されたセント・ジェームズ パークについて」よりも優れているのではないかと。詩人は、「陛下、詩人というものは、真実よりはフィクションにおいて成功するものです」と答えたという<sup>8)</sup>。

この当時、アンドルー・マーヴェル(Andrew Marvell)の詩はまだ出版されておらず、政治的な論客として知られていたため、現在では詩人としてはるかにマーヴェルより評価の低いウォラーが、17世紀のこの時代には、詩人として名声を持っていた。もっとも、既に述べたように、また後にドクター・ジョンソンに変節漢と非難されるように、彼の政治的信条は玉虫色であると同時代の人々は見ていた。

アラステア・ファウラー(Alastair Fowler)は、カントリーハウス詩のジャンルを最初に定義したヒッバード(G. R. Hibbard)が論じていない王政復古期を、カントリーハウス詩の伝統の「第3段階」と呼び、18世紀のアレクザンダー・ポープの時代へ至る約半世紀へ光をあてている<sup>9)</sup>。ファウラーは、カントリーハウス詩の定義を、エステイト詩(Estate Poems)としてヒッバードより広義に解釈したので、カントリーハウス詩の一貫したジャンルの存在の流れが明確になった。

王政復古は、政治史上英国の大きなターニング・ポイントであったように、文化的風土にも一大変化をもたらした。「改修されたセント・ジェームズ パークについて」は、ベン・ジョンソンの始めたカントリーハウス詩のジャンル固有のエートスを全く逆転させている。カントリーハウス詩の伝統は、暗黙裏に良き場所は田舎、悪しき場所は都市という前提にたって、本来、場所は田園(カントリー)に設定し、そこに建つ慎まじやかな英国風の屋敷の賛美を通してその主人の美德を賛えるという枠組みをもっていた。その背後にあったのは、ジェームズ1世やチャールズ1世がたびたび出した帰郷令が示すように、地方貴族へ領地をしかるべく治めるようにと言う政治的な勧告であった。彼等の多くは、仕事や議会への出席もあったとしても、主に楽しみのためにロンドンで一年の大半を過ごして、不在地主化していたのだ。

貴族が農地経営を等閑にしたために疲弊した17世紀の田園の活性化をはかった初期スチュアート朝の政策を、リア・マーカス(Leah Marcus)は、地方の「再田園化」と解釈し

ている<sup>10)</sup>。田園を“repastoralize”するためには、例えば、狩りの好きなジェームズ1世が突然ペンズハースト屋敷をその道すがらに訪問したように、田園に国王の存在の刻印を押して田園を宮廷化し、田園の価値を高める必要があった。

ところが、ウォラーの「改修されたセント・ジェームズ パークについて」においては、詩の舞台はもはやかつて異口同音に賛美された田園から、悪徳の蔓延する場所として非難された首都ロンドンへと移された。その上、都市のほぼ中心にあるセント・ジェームズパークにおいて「緑の宮殿」(“green palaces”, l. 71)を建てることこそが重要視されている。田園ではなく、都市に「緑の宮殿」を建設するという理想は、勿論、賛美のレトリックにくるんだ、新しい国王の政治に対する詩人からの要望や忠告であった。しかし、それがたとえ比喩的なレヴェルで表現されているとしても、この詩におけるこのような空間の設定の方法自体が、明らかにスチュアート朝初期の地方政策を婉曲に否定した内容となっている。現実的にも、貴族達のとった行動は、そのような変化を証明している。彼等は、20年近い内乱の間、反体制派としてロンドンから追放され、厳格な清教徒の支配を地方で耐え忍んだ。彼等は、田舎における閉塞状況にすっかり飽きていたため、王政復古となるや否や、こぞってロンドンへ押し寄せてきた。

内乱の間、「隠棲」をテーマとするカントリーハウス詩の中で、文学的のみならず、政治的、宗教的にも理想化された田園は、王政復古時代になると退屈の代名詞になってしまったのだ。この現象は、王政復古喜劇のジャンルにも顕著に見られた。一例を挙げると、ウィッチャリー(William Wycherley, 1640–1715)の*The Country Wife*においては、地方の地主が妻や結婚適齢期の娘とロンドンへやってきて、彼女達がたとえ放蕩者と結婚しようとも、田舎の従属ではなく、都会の自由を選択するという田舎の男性優位の社会への風刺をプロットにしていた。このような当時の状況を考慮すれば、ウォラーが新しい国王の復位を祝う詩の場所に、都市、ロンドンにおける王権の中心、ホワイトホール宮殿に近いセント・ジェームズパークを設定したのは当然であった。

内乱の結果、混乱と無秩序に陥り不安定な状況にあった英国において、平和と秩序の回復は、最も望まれていたものであった。英国の国家のマイクロコズムである無残に荒らされたセント・ジェームズパークを美しく改修する大々的な国王の営為は、まさに世界のマイクロコズムである英国に秩序を与え、あるべき姿に再建する政治的な行為の可視的な意義ある表象として機能した。

136行からなる「改修されたセント・ジェームズパークについて」は、この苑全体を第2の「エデンの園」に喩えて、聖書的なイメージで始まっている。西のケンジントン・ガーデンから東へ4つ続く王室のパークのうち、最小のものを「エデンの園」と称するのは、賞賛の詩につきものの誇張的表現であるとしても、失われたエデンの回復はとりもなおさず、内乱で失われた英国の回復という大きな準拠枠にぴったり沿うものであった。

王政復古の実現は、特に王党派の人々にとっては、政治的というよりは殆ど宗教的な奇跡として理解される向きもあったため、セント・ジェームズパークを「エデンの園」と表象するのは、次の2つの理由で極めて適切であった。第1に、チャールズ2世が1630年に誕生した時に、真昼であったのに星が太陽にまけじと輝いていたのだ。キリストがベツレヘムの馬屋で誕生した時に、輝く星が東方の三人の博士を導いた時のように。彼の誕生は、キリストのそれと重ね合わせざるを得ない因縁があると、人々はその時既に感じたのだ。

第2に、チャールズ2世がドーヴァーへ上陸した時、奇しくもキリストが布教を始めた年令と同じく30歳になっていた。

Of the first paradise, there's nothing found:  
Trees set by heaven are vanished, and the ground;  
Yet the description lasts: who knows the fate  
Of lines that shall this paradise relate? (ll. 1-4.)

王政復古以前のカントリーハウス詩において、屋敷や領地は所有者個人のエンブレムであったが、この詩の示すように、ファウラーの言うカントリーハウス詩の伝統の第3期には、領地は国家のエンブレムに変化している<sup>11)</sup>。「神の造られた最初の園の木々も土地も、もはやどこにも見当たらないのに」、エデンについて書かれたテキストは聖書として残っている。「この苑について語る詩の運命を誰が知ろうか？」と自問した詩人の問いは、17世紀には時の詩人であった彼にとって修辭的疑問であったかもしれないが、それは殆ど文字通りの予言となった。(この詩は最近盛んになった王政復古時代の文学研究がなおざりにしており、今も正面から論じられることは少ない。)一方、聖書のエデンとちがって、第2の「エデンの園」は19世紀にトーマス・ナッシュによって改修され、近代的な意味でのセント・ジェームズ公園として多くの人に憩いの場をあたえて存続してきた。

「改修されたセント・ジェームズ パークについて」という詩の構造は、内容的にみると殆ど中ほどで2つの部分に分かれている。ファウラーは、前半に国王のプライヴァシーが、後半で国家が論じられていると述べているが<sup>12)</sup>、前半にも国家的なトピックがいくつか侵入している。この詩の書かれた1661年頃には、パークの改修はすべて完了していなかったと思われるが、基本的にはカントリーハウス詩の伝統の一つである領地内散策の詩のかたちを踏襲している。ウォラーの詩神が歩みを進めるうちに見るセント・ジェームズ パークのトポグラフィーには、たとえプレジャー・ガーデンの部分を見えても、いつのまにか国家的なレベルでの政治が忍びこむ。後半では、古くから植えられていた榆の木立が新国王の「緑の宮殿」(71行)となり、また彼の孤独な散歩道となって、視点はチャールズ2世自身のものにすりかわる。そこから彼が見る眺望が、未来の政治のエンブレム、国家の元首としてのありかたの重い問題に変貌していく。

まず「改修されたセント・ジェームズ パーク」という詩の前半を分析しよう。詩人の視線は、セント・ジェームズ パークの改修の主要な部分である東西に走る人工池 (the Canal) を中心に、その岸辺に新しく植えられた若木や、人工池 (詩においては「湖」と形容されている) の貴婦人の釣り人達、果樹園、鳥の飼育檻、そしてイタリアで始まり、フランスで人気のあったベル・メルと言うスポーツのモールと呼ばれる球技場へ巡って行く。

王政復古以前のカントリーハウス詩の伝統では、領地の自然の自発的豊穰という豊かな恵み——レイモンド・ウィリアムズ (Raymond Williams) が「労働の隠蔽」と非難した——が、賞賛され、人工対自然の二項対立では、人工はむしろ自然を歪める悪しきもので、自然こそが、各屋敷やそれに属する村落共同体や、またそこへの賓客である国王をもてなす理想のホスピタリティーの源泉であった。

これに反して、「改修されたセント・ジェームズ パークについて」において、野蛮な破

壊という行き過ぎた人工に修復を加え秩序を回復するのは、もはや自然ではなく、むしろ人工という手段であるのは、当然と考えられている。もう自然の自発的豊穰をゆっくり待つ時間はないし、その可能性は殊に都市においては皆無であった。既に述べた政治的理由で、早急に美しい自然がこの地に造られねばならなかったのだ。しかも、新国王は、フランス風に庭園を造るというよりは、それを凌駕する見事な庭園を完成すべき意気込みを持っていた。セント・ジェームズ パークの人工池は、ヴェルサイユ宮殿に7年も先駆けて造られたのだ。後にヴェルサイユ宮殿の庭園を手がけたル・ノートルにセント・ジェームズパークのデザインを依頼したと言われているが、その証拠となる文献は残っておらず、再びモレ兄弟がその任にあたっただけ。その大規模な人工は、歴史の転換点に王位についたチャールズ2世が、自国の国民にも、また諸外国にも自己の権威と権力を誇示する手段であった。

人工対自然の二項対立は、古くからの命題であり、人工は伝統的には自然のあるべき姿を捻じ曲げる悪しきわざと考えられていた。しかし、スチュアート朝後期になると、それは肯定的に評価されているようだ。もともと、ヘンリー8世がセント・ジェームズパークの地を囲い込んだ時、あたりは湿地であった。しかし、川はなかったので、チャールズ2世は人工池を2年掛かりで兵士に掘らせた。その様子を興味深く見に行つたと記しているのは、好奇心旺盛で新しいものに敏感な日記作者のピープスである。人工は、人々が楽しむための自然を作るという目的のために、積極的に使うべきものとして受け容れられ、ここに技術に対する原始的ではあるが、ある種の近代的な感性の萌芽を見ることができる。

フランス式庭園の水を導入した庭園技術は英国でも既にとりいれられ、水は庭園美学の重要な一要素であった。カントリーハウスの近くを流れる川は、人々の飲料水として実用に供されたが、この人工池の水は、国王の権威の象徴であった。聖書のエデンの園を流れていた4つの川のかわりに造られたセント・ジェームズパークの人工池は、実際、2つの近くの池と接続していたのであって、テムズ川とはつながっていなかった。しかし、この詩はそのような地理学的な構造を無視し、事実と相反する植民地主義的なレトリックをしたてあげた。海へ流れこんでいるテムズ川は、潮の満ち干でこの人工池に流れ込んで、恰も「国王の帝国」に貢ぎ物をしているかのようだ。つまり、英国という四海に囲まれた島国に、海の彼方の世界が敬意を払っているのである。英国を海外貿易で栄える「帝国」と称し、国王に大きな賛辞を捧げているのだ。

Instead of rivers rolling by the side  
Of Eden's garden, here flows in the tide;  
The sea, that always served his empire, now  
Pays tribute to our Prince's pleasure too. (ll. 5-8.)

この部分の言説は、ウォラー自身の「クロムウェルへの賞賛の詩」の論理を継承するものである。王政復古は確かに内乱のあと始末を行つたが、1650年代の商業と海外貿易の発展というクロムウェルの政策の功績により、英国のヨーロッパにおける国際的地位は、以前とはくらべものにならない程向上した。ウォラーの詩に限らず、クロムウェルに捧げられた多くの賛辞の詩がこぞって褒め称えたのは、このような英国の商業的な海外発展であつ

た<sup>13)</sup>。1660年以後の詩は、多かれ少なかれ、1650年代の詩のこのような英国の帝国主義的な拡張を是認する言説を継承している。

人工池を掘る事業は、大変なことであった。ウォラーは、「都市を建設するより困難であるのはよく知られている」(11-12行)と述べて、チャールズ2世の大がかりな苑の改修をかなり誇張的に賛美している。彼はその困難さについて既に熟知していたのだ。造園にも精通していた彼自身、その難事業を経験していた<sup>14)</sup>。ウォラーは、“the Grove”と名づけたフランス風の庭園に矩形の人工池を設けていた。それは、1656年頃に故郷のバッキンガムシャーに建てた、彼のカントリーハウス、ピューリタン・ミニマリズム様式の代表的建築の一つであるホール・バーン邸(Hall Barn)にあった<sup>15)</sup>。

セント・ジェームズ パークの人工池の両岸に沿って、並木道のために植えられた若木の成長と、チャールズ2世の末永い御代の繁栄が祈られるのは、古典文学の伝統を継承するカントリーハウス詩の常套である。忘れてはならない事実は、英国史のこの時期において植樹は単に木を植えるという造園の一工程ではなく、優れて王党派的な政治的行為であったということである。というのは、内乱の時代、二つの陣営のイデオロギー的な争いは、単に戦闘行為だけではなく、王党派の植樹した森や林の木々を、議会派軍が莫大な規模で伐採するという破壊的な行動によっても示されたからである<sup>16)</sup>。

また、周囲の自然をも含めてカントリーハウス全体がカントリーハウス詩の伝統の中で、秩序の空間でもあったが、ウォラーの書いたセント・ジェームズ パークについての詩では、秩序への強迫観念にとりつかれたような希求が顕著に表明されている。新たな木々が、厳格な秩序をもって植樹されていたこと、つまり、音楽で難事業を成し遂げたといわれる、オルフェウスやアンフィオンも匹敵しないほどの整然たる幾何学的な木立の並び方と、表現せざるをえない程の秩序への強いこだわりは、内乱の騒乱状態への恐怖のもたらした後遺症の重さを証明する。王政復古時代に入って最も望まれたのは、何よりも調和の精神のもたらす真の秩序であった。

For future shade, young trees upon the banks  
Of the new stream appear in even ranks:  
The voice of Orpheus, or Amphion's hand,  
In better order could not make them stand. (ll. 13-16.)

セント・ジェームズ パークという新しいエデンは、多義的な価値を含み、楽しみのための場所であり、とくに木陰は愛の空間でもあった。季節は、聖書にあるエデンの園のような常春ではなく、夏と冬のいわば両極端が描かれ、両方の季節の異なった楽しみ、夏の水浴び、当時オランダの影響で流行りだした冬のスケート、また、人工池に舟遊びの人々の歌声と、天から帰ってくるそのこだまの響きなどが、やはり二項対立的に枚挙されている。(21-26行) 空を黒く覆わんばかりに沢山の鳥が飼われている、チャールズ2世のお気に入りの珍しい種類の鳥を集めたバード・ケージ、人工池に泳ぐ銀色の魚等々、対照的な二つのものが一つの場所で和解し折り合うイメージが次々と展開されている。それらの二項対立的イメージ群は、王政復古の時に必要であった両極端の政治思想の和解へのメッセージをもこめて、セント・ジェームズ パークの最も重要な表象である、旧約聖書からの「ノア

の箱船」(43行)と、新約聖書からの天から降ってきた「ペテロの四隅をしばった大きな布」の二つに収斂するのだ。

The choicest thing that furnished Noah's ark,  
Or Peter's sheet, inhabiting this Park: (ll. 43-44.)

まさに内乱のイメージである洪水から地上の生き物を救うため、ノアの一族と共にすべての中から最も厳選された動物達が乗った箱船や(創世記6-8章)、また、使徒ペテロが異邦人の地で空腹を覚えた時、空から降りてきた四つの隅がしばられ、中にあらゆる生き物の入った大きな布(使徒行伝10章:9-16, 11章:5-10)は、新旧両聖書から引用された、古い秩序を廃して新しい秩序をうちたてる意味を含む、王政復古体制賞揚には最も適した表象であった。また、それらは、ピープスが日記に書いているように、実際、セント・ジェームズ パークに集められた珍しい珍しい数の動物や鳥類の象徴する国家の豊かさと、その収集を可能にする国王の権力の大きさの表象でもあった。

箱船は、かつて、カントリーハウスの豊かさ、特に自然の自発的豊穡の表象として機能していた。「改修されたセント・ジェームズ パークについて」が書かれる約30年程前に、トーマス・ケアリ(Thomas Carew, 1595?-1640)は、“To Saxham”(「サクサム屋敷に寄せて」)を書いた。その中で、草深い田舎のサッフオークにある、カントリーハウスのあるべき姿を保つ、つつまじやかなクロフツ家の屋敷をケアリは「箱船」(22行)に喩えていた。空がまるで「鳥の飼育場」と18行目に出てくるように、この屋敷は豊かな自然に恵まれていたのだ。鳥や動物達は、決して権力や財力を使って収集されるような珍重されるべき種類のものではない。英国に普通見られる鳥獣が、厳しい冬の季節を逃れるために、みずからクロフツ家の人々のための「捧げもの」として、避難所を求めて集まってくる。サクサム屋敷はまさに「箱船」であった(25行)。

Or else the birds, fearing the snow  
Might to another deluge grow,  
The pleasant, partridge, and the lark,  
Flew to thy house, as to the Ark.  
The willing ox, of himself came  
Home to the slaughter, with the lamb;  
And every beast did thither bring  
Himself, to be an offering. (“To Saxham” ll. 19-26.)

「サクサム屋敷に寄せて」においては、季節を春ではなくて、冬に設定してある点一つをとっても、1612年のジョンソンのからは少なからず変化しているものの、動物達は進んで寛大なホスピタリティーのテーブルのごちそうになり、訪れる人々にも分け隔てなく与えられ、彼等の飢えを満たすのである。チャールズ1世も帰郷令を一度ならず発していたように、地方における貴族達のノブレス・オブリジエは衰退しつつあったが、サクサムの「箱船」は、単に珍しい動物の収集を見て視覚的に楽しんだり、飼育する喜びを満足させるだ



けの、特権的な王侯の小型動物園ではなく、人の空腹を満たし、客人をあたたかくもてなす切実でかつ基本的な実用に役立つものであった。

セント・ジェームズ パークの「水晶のような湖」と形容される透明な人工池では、「銀色の魚」の側を「美しい彩色をほどこされた舟」が遊んでおり、それに乗った貴婦人達は、当時女性の間で流行していたという釣りを楽しんでいる。“silver”, “gilded”, “crystal”などの金属や鉾物の高貴な色彩のイメージは、セント・ジェームズ パークが身分の高い人々の集う場所を造るというチャールズ2世の意図を反映している。

Beneath, a shoal of silver fishes glides,  
And plays about the gilded barges' sides:  
The ladies, angling in the crystal lake,  
Feast on the waters with the prey they take:  
At once victorious with their lines, and eyes,  
They make the fishes, and the men, their prize. (ll. 31–36.)

釣りの獲物は、「釣り糸」、即ち魚と、釣り人達の「視線」の釣り上げるもの、つまり彼女達の流し目でつりあげられる男達の両方であった。国家秩序の回復の表象であるセント・ジェームズ パークは、人々が出会う場所である限り、男女の出会う場所でもあった。ピューリタニズムの厳格な人間性を抑圧した支配の反動として、快樂原則はここにも紛れなく忍び込んでいた。

先の引用に続いて、「無数のキューピッドが大波に乗って」「陛下の宮廷の素晴らしさを報告させるために、テティスに遣わされた海のニンフ達が渦巻く潮とともに」(37–39行)人工池に入ってくるという神話的な言説が続き、釣りをしつつ魅力的な男性を物色していた貴婦人たちのセクシュアリティへの言及をさらに強調している。既に、新たに人工池の岸に植えられた若木の育つ頃には、その道で、恋が成就し、恋人達の散歩路になることも予言されていた(21–22行)。

かつて、7、8年前の文学に登場した釣り人たちは、貴婦人の釣り人たちのように、いわばホップズ的な自然状態を容認する、人間観を持っていた。1650年代の始めに、議会派軍のフェアファックス将軍が、クロムウェルと袂を分かって隠棲した北方の田舎のカントリーハウス、アプルトン屋敷において、彼の娘の家庭教師、マーヴェルは、夕暮れにデントン川から帰る鮭釣りの漁師の姿を見た。彼は漁を終えて、舟を逆さに担ぎ家路を急いでいた。逆さの舟は亀の甲羅に似て、水と陸の二つの場所で生息可能な亀のように、朝は川へ漁に出かけ、夕べには陸の家へもどる釣り人の人生を象徴していた。マーヴェルにとって鮭釣りの暮らし方は、意味をもって見えた。彼は、1651年頃の動乱に満ちた歴史の世界をどのように生きるか、この頃選択に迷っていたのだ。フェアファックス将軍のように、瞑想の世界に生きるか、川で鮭をとる漁夫のように、歴史に竿をさして生きるかを。ヨークシャーの片田舎の釣り人は、彼自身生活者であり、瞑想と行動の二つの原理を体現するエンブレムであった<sup>17)</sup>。

このように、地方的で、自己の生き方を静かに追求する釣り人は、アイザック・ウォルトン(Izaak Walton, 1593–1683)の書いた『釣魚大全』(*The Compleat Angler*, 1653)にも登

場する。王党派の信条を内乱の時代に曲げることなく守りぬくために、彼は風景の中へ身を隠した。釣り糸を垂れつつ、様々な人々とのつきあいの中で、カントリーハウスが象徴する古い英国の理想化された農村共同体の伝統的かつ精神的な紐帯を、ノスタルジアをこめて尊重した。このように、1650年代の王党派に属する政治的信条の釣り人も、革命軍に身を投じるマーヴェルの描く釣り人にとっても、釣りという行為自体が、すぐれて内省的でありながら、政治的なものであったのだ。『釣魚大全』が、単に、レクリエーションの一つである、野外スポーツの釣りの本として読まれ始めたのは、18世紀になってからのことであった<sup>18)</sup>。

どちらの政治的立場に立とうと、1650年代の釣り人に共通の、政治的であり同時に内省的な言説は、王政復古になると解体されて、快楽のそれに変わりつつあった。この詩において色目を使うのが貴婦人であった点は、内乱の時代に女性の主体性が比較的尊重された名残をとどめている。しかし、これ以後王政復古時代の文学の中で、女性の地位はセクシュアリティーにおいてもその主体から、客体へと急速に変化していった。

「改修されたセント・ジェームズ パーク」の前半の最後は、改修の一つの眼目であるモールと呼ばれる、フランスから伝わったペル・メル球技のための球技場で、ペル・メルにうち興じるチャールズ2世の勇姿を描写している。その前に、球技で渴いた彼の喉を潤す、夏にさえ冷たい氷入りのカップが、両極端の和解の象徴として描かれている。クラレンドン伯が起草したブレダ宣言を以って、チャールズ2世の王政復古が成立したとは言え、和解の原理は当時の政治的な根本理念として必須の要件であったのだ。

All with a border of rich fruit-trees crowned,  
Whose loaded branches hide the lofty mound. (ll. 45-46.)

Yonder, the harvest of cold months laid up  
Gives a fresh coolness to the royal cup:  
There ice, like crystal firm, and never lost,  
Tempers hot July with December's frost; (ll. 49-52.)

セント・ジェームズ パーク内の豊かさの一つは、英国で最初に造られた、氷室である。これはチャールズ2世のカップを冷やした氷を冬から貯蔵しておく、英国初の冷凍庫ともいうべきものであった。熱を避けるために、果樹園の枝で隠された小高い築山の地下に、深く掘られた氷室用の洞穴があったという。英国において17世紀に入ると生活の心地よさの追求が少しずつ始まっていたが、氷を夏に確保するのは、国王や王室の限られた人々のみが享受できる最高の贅沢の一つであった。冷たさと暑さ、氷の採取される12月と氷が消費される7月、冬と春、アルプスと洞穴、高みと深さなど、両極端の二項対立的価値は、氷室用の洞穴をもつ築山の表象により融和されて、チャールズ2世の氷で冷やしたカップに求心的に集中する。彼こそが、王政復古の世にあって和解の中心なのである。

セント・ジェームズ パーク北端に造られたモールで、あの冷たい氷入りの飲み物で爽やかに元気をとりもどしたチャールズ2世は、夏の間、お得意のペル・メルを愛妾や宮廷人たちと共に元気一杯プレーするのである。国王の若く優雅で活力に満ちた容姿を一目見よ

うと、モールの両側の二列の並木路に人々はやって来た。モールに近いほうの道は貴族達  
が、外側のそれには身分の低い者達が、各々の身分相応の秩序を守って占めていたのだ。  
チャールズ2世が球を飛ばす勢いは力に溢れており、小型の大砲が煙をあげながら砲弾を  
放つ時に似るほど激しく、そこに人々は彼の御代への希望を確信し末永い統治の可能性に  
安堵したのであった。

かつてカントリーハウス詩の伝統では、つつましく質素で、英国風であることがすべて  
において良しとされ、外国風の華美は軽蔑すべき、かつ排斥すべきものであった。氷室も  
ベル・メルも、また並木道もイタリアやフランスから入って来た外来のものであったが、  
それらは容易に受容された。特に氷室はチャールズ2世によって数が増やされ、並木道は、  
植樹と造園が富裕階級に広がり、カントリーハウスのパークには必ず門から屋敷へのアプ  
ローチに造られていった。王政復古以後の英国の文化的風土は、大きく変貌しつつあった  
のである。

セント・ジェームズ パークの古い並木道は、「古木でできた生けるギャラリー」(68行)  
である。カントリーハウスの建築において、ギャラリーはその屋敷の社会的prestige  
の重要な指標であった。家柄の良さを示す祖先や王族の肖像画、狩りの腕前を証明する、  
射止めた鹿の頭の剥製、高価な調度品などを沢山飾り、かつ、雨続きの天候であれば、散  
歩のための雨天体操場にも早変わりし、パーティーも開ける、巨大な廊下を思わせる多目  
的室であった。ヴェルサイユ宮殿の鏡の間は、まさにギャラリーの一例である。普通は屋  
敷の二階か三階にあり、窓からは一望のもとに、美しい整形庭園や湖、そして権威と所有  
の象徴である立派な並木道が視覚の軸線にそってのびる景色を楽しむことができる空間で  
ある。

この生きた木立の形成する「ギャラリー」は、この頃、まだ戦いのきな臭さが払拭でき  
てはいない。並んだ樹木は、「もう一度天を攻めるかのように、腕を高く突き出している、  
大地の大胆な息子たち」(69-70行)であるかのような。内乱の暗い記憶は、生々しくよみ  
がえる。政治勢力の危ういバランスの上に築かれた体制は、常に脅かされている。この木  
立のギャラリーの表象において、詩人の詩神の視点が、詩の後半を支配するチャールズ2  
世のそれに移行し、彼の政治のあり方に対する論議の過程が始まる。

並木道の「木陰」は、代々の国王が眠り、支配した「緑の宮殿」(71行)に見立てられ  
る。カントリーハウス詩に現れる各屋敷の庭や広い自然の中の木陰は、様々な時に、様々  
な人たちが異なった過ごし方をした空間であった。ペンズハーストにおいては、榎の木の  
下で主人の妻がお産の徴候に気付く、かと思えば、同じ所が夜は神話的な異教の神々の催  
す宴の席であり、内乱の間田舎のカントリーハウスに隠棲を余儀なくされたマイルドメイ・  
フェインは、木の下で神の瞑想に耽り、アプルトン・ハウスにいたマーヴェルは、木々の  
茂みで「気楽な哲学者」となり、小鳥たちの言葉すら理解し、「庭園」の「緑の木陰では緑  
の思いに」無上の幸せを味わっていた。

チャールズ2世は、ベル・メルの球技で汗を流し、鳥たちに餌をあたえ、散歩を楽しん  
でばかりはいられない。セント・ジェームズ パークの古い並木道の樹陰は、プライベート  
な個人の庭園や木立ではなく、英国の国家の存亡がかかるまさにパブリックな「緑の宮  
殿」であった。彼の祖先の王たちが緑の「聖なる林」をしばしば訪れて「光や喧騒という  
障害から逃れ」、神の使いである「天使たち」に助けられて「より賢明に成長した」(74-75

行) ように、彼もこの「緑の宮殿」へひきこもり、高貴な思いをもって国家の政策を維持し、外交政策を決定しなければならないのだ。森は、パストラルの文学における純粋無垢のひきこもりの世界であると同時に、最も世俗的であるチャールズ2世の新しい政府のありかでもあった。

In such green palaces the first kings reigned,  
Slept in their shades, and angels entertained:  
With such old counsellors they did advise,  
And by frequenting sacred groves grew wise.  
Free from th'impediments of light and noise,  
Man, thus retired, his nobler thoughts employs.  
Here Charles contrives the ordering of his states,  
Here he resolves his neighbouring princes' fates:  
What nation shall have peace, where war be made,  
Determined is in this oraculous shade; (ll. 71-80.)

スチュアート朝の王権神授説への婉曲な言及は、国王の政治が、「神の御託宣を聞く聖なる森」で決定されるという表現にとどめられている。「聖なる森」は、ローマやヘブライのそして古い英国の三つの森を連想させる。第一は、黄金時代の森であり、第二は、神と二人の天使が族長アブラハムを訪れた森、そして第三は、ウォラーが心に留めていたのではないかと推測される、英国古来のドルイド教の森である。ドルイドの僧侶たちは、樹木を崇拜し、樹木から知恵を引き出していたのだ。

かつて記憶術が、建物のイメージを用いて、多くのことを分類し、秩序をもって記憶する方法をみだしたように、チャールズ2世の視線は、「聖なる森」の「緑の宮殿」から、セント・ジェームズパークの東南に位置する英国の政治と宗教の府の建物を一つ一つ追いながら、再び王位に復活した国民の牧者としての王のありかたを模索するのである(83-126行)。実際、この詩が書かれた翌年、1661年の戴冠式の記念に铸造されたメダルは、イングランド、スコットランド、そしてアイルランドの三つを象徴する三つの羊の群れを率いる、若き王の姿を刻んでいた。それは、国家と英国国教会の両方の首長であるチャールズ2世に相応しい羊飼いのアイコンであった。

最初に見るのは、当然、ホワイトホール宮殿である。国家を意味する時、この詩においては、常に「帝国」(“empire”)という言葉が使われ、世界における英国の位置が強く意識されている。その政府の所在するホワイトホール宮殿は、その起原から語られ、ウルジー枢機卿の野心が分不相応だと、彼の私邸が国王の宮殿として召し上げられた経緯を「運命によって」と正当化して、ウォラーは間接的にチャールズ2世の権力に追従的なスタンスをとっている。スチュアート朝初期とくらべると、この当時、王党派の間でさえ王権への支持が相対的に弱まっていたので、チャールズ2世が王として新しい時代を支配するためには、過去の歴史という神話的な要素に包んで、マッキャヴェリ主义的な王権の強い発動のあったウルジーの事件は、どうしても語られねばならなかったのだ。

これにくらべると、過去の良き時代を振り返っていたカントリーハウス詩の多くが主要

なテーマにとりあげた、貧しい人々を搾取しないで屋敷を建てた貴族の美徳の賛美は、ある種の牧歌性を帯びてくる。それがたとえスチュアート朝初期の地方政策の一環に沿うものであったとしても。歴史の歯車は確かに時間とともに少しずつ進んでいるのだ。

次に眺望される建物、ウエストミンスター寺院は、国王が戴冠式を行い、死後は埋葬される、国王の生と死とが一ヶ所で接する場所である。国王の最初と最後を司る聖なるウエストミンスター寺院というコンテクストにより、世俗的な国王の支配は聖化されている。勿論、このうらに人間の命に限りがあるという誰にも共通の運命を、チャールズ2世に喚起しているウォラーの意図を読み取らざるを得ない。また、ここでは当然直接言及されていないが、ウォラーの意識下には、3年程前に死んだばかりのクロムウェルのことがあったに違いない。

内乱の間、英国では国王や主教制に関する教会が方々で議会派軍のヴァンダリズムにあった。この寺院は内部の破壊は免れなかったとしても、外部の軀体はもちこたえた。隣接する下院では、チャールズ1世の処刑や、共通祈祷書の廃止などが決定されていたのに。その寺院の荘厳さは、王制の勝利を予見した予言者の姿として描かれている。

When others fell, this, standing, did presage  
The crown should triumph over popular rage:  
Hard by that House where all our ills were shaped  
Th'auspicious temple stood, and yet escaped. (ll. 97-100.)

これに続いて次のようにウォラーは、王権神授説への賛辞を遠回しに捧げている。“What falls from heaven” (l. 104), 「天から下るものは」、即ち、神の意志は、エトナ山の頂上にある天から降る雪が、その噴火で遠くの地方を灰塵に帰してもそのまま融けずに残っているように、高くそびえるウエストミンスター寺院の建物を内乱から救ったのだ。

So, snow on Aetna does unmelted lie,  
Whence rolling flames and scattered cinders fly;  
The distant country in the ruin shares,  
What falls from heaven the burning mountain spares. (ll. 101-104.)

チャールズ2世が無視できないのは、議会の勢力であった。下院の議事堂は、かつて、王室に属していた聖ステイーヴン教会を1550年以来国会という世俗の用に供されている建物である。王室と国民、また宗教と政治とは網の目のように編まれている。チャールズ2世の目はセント・ジェームズパークから、政治のすべての機関である、行政の府であるホワイトホール宮殿、王室と深く結びついた国教会の寺院、下院という立法府に加えて、司法府である高等法院のあったウエストミンスター・ホールを眺望し、国家の牧者としての責任の重さを痛感するのだ。彼は、その重責を全うするために、「私的な情熱の赴くままにはできないし、若者の快樂もおあずけになって、天下のまつりごとのために犠牲となるのだ。」(111-113行)

On which reflecting in his mighty mind,  
No private passion does indulgence find:  
The pleasures of his youth suspended are,  
And made a sacrifice to public care. (ll. 111-114.)

人間的な成長を遂げるためには、彼は散歩路を一人で歩き、孤独のうちに道すがら自己の政治について自問自答する。宮廷の取り巻きの意見に惑わされずに、内乱の後平和の時代をもたらしたことで歴史上名高い、初代ローマの皇帝であったアウグストスや、危機の時に仲裁者として国家を守護した人物の原型として語り継がれている神話的存在のヘラクレスなどに、帝王学を究める上で模範を学ぶことが大切なのだ。ウォラーは、このような平和の回復と和解の努力の重要性を説く忠告に加えて、植民地主義的な帝国の拡張と貿易の拡大についても進言している。カントリーハウス・エートスの一つの柱であった、外国のものを避けて、英国的なものを、しかも地方的なものを尊重するという価値観は、王制復古時代に入って英国の未来を描く時には、些か時代遅れのものとなっていたのであった。チャールズ2世の額は、平和の象徴であるオリーブの枝の冠のみならず、勝者の象徴である月桂樹の冠でも飾られなければならないのだ。(117-120行)

How peaceful olive may his temples shade,  
For mending laws, and restoring trade;  
Or, how his brows may be with laurel charged,  
For nations conquered, and our bounds enlarged. (ll. 117-120.)

孤独な並木の散歩路を反対側へ出ると、チャールズ2世の視線に入るのは、彼が誕生したセント・ジェームズ宮殿である。まるで奇跡のように実現された王政復古は、既に述べたように、当時は宗教的な奇跡とすら受け取られていた。父王のチャールズ1世が、息子の誕生を神に感謝してセント・ポール寺院で祈りを捧げた帰り道、屋間であるのに、星が輝いていたのだ。3人の東方の博士をキリストの誕生した馬屋へ導いたのも昼までも明るく輝く星であった。ウォラーは、単に、恰もキリストの再来のようにチャールズ2世を神格化するという神話的な言説としてこの事実を述べているのではない。

真昼に輝いた星は、チャールズ2世の誕生のために、夜と昼という正反対の闇と光を一致させたように、彼は、「引き裂かれた世界を、和解させるように生まれついていたのだ」とヘラクレスを引用して提出した和解のテーマが再び繰り返されている。和解の象徴であるヘラクレスの像は、ジェームズ1世がセント・ジェームズ宮殿や、宮廷の使用の庭にいくつか置いていたものであった。相反するものの一致を重んじる精神は、当時最も必要とされていたばかりか、それはチャールズ2世の祖父以来の教えでもあったのだ。

His thoughts rise higher, when he does reflect  
On what the world may from that star expect  
Which at his birth appeared, to let us see  
Day, for his sake, could with the night agree:

A prince on whom such different light did smile,  
Born the divided world to reconcile! (ll. 127-132.)

美しいセント・ジェームズ パークの改修は、政治的に重要なモニュメントをつくりだす事業であったが、それにもまして大切なことは、美しいセント・ジェームズ パークの苑よりも、英国という「帝国」をさらに立派に再建することであった。

Reform these nations, and improve them more  
Than this fair Park, from what it was before. (ll. 135-136.)

“these nations” は、複数であり、“them” という代名詞でうけられているので、文法的には、議会は軍と王党派の二つを指しているのではなく、イングランド、スコットランド、そしてアイルランドの三つとしての英国か、またはもっと広くヨーロッパ諸国を意味するのか、そのどちらかで文脈からは判じ難い。けれども、この詩の全体コンテクストを考慮すれば、それは間違いなく前者を指していたのである<sup>19)</sup>。

王政復古期以前のカントリーハウス詩では、英国の表象は、恰も洋上に浮かぶ、大陸からも切り離された楽園のような島であり、屋敷の立つエステートはその島のマイクロコズムであった。ところが、17世紀半ばを過ぎると、英国は、たった一つの孤立した島ではなく、旧大陸をもまた新大陸をもパースペクティブに入れた帝国であり、セント・ジェームズ パークという王室のエステートは、帝国のマイクロコズムであった。

このように国際的な帝国を再建するために、アウグストスやヘラクレスにあやかるような努力をウォラーは願ったが、チャールズ2世の殊勝な心がけは、実際には、殆ど2年位しかもたなかった。更に大掛かりなハンプトン・コート宮殿やグリニッジ宮殿の改修も進んでいったが、彼の関心は、やがて英国の“body politic”「政体」よりは、女性の“body”「肉体」の方にずっと熱心に向いていったのだ。自らの放蕩で、宮廷を墮落させるチャールズ2世は、セント・ジェームズ パークの改修後、ほどなく、この苑を目指していた秩序の空間から、無秩序と混乱のそれへと変質させてしまうのであった。運良く1666年のロンドン大火にも、無事に焼け残ったセント・ジェームズ パークは、上流社会の風紀の乱れを象徴する場所になり、多くの諷刺詩は貴族達の退廃を攻撃する時に、この地を格好のターゲットにした。今まで論じてきたウォラーの詩が、ロチェスター卿により、露骨なまでの性的パロディーで揶揄されたのは、一つの典型例である<sup>20)</sup>。

王政復古後のカントリーハウス詩として、ファウラーのカントリーハウス詩集に収録されているのは、チャールズ2世の母にあたるヘンリエッタ・マライアの宮殿、サマセット・ハウスの改修についての二編である。ウォラーとカウリーの作である。内乱中には、この宮殿も議会派軍により使用されて、傷みも激しかったため、修理が行われた。しかし、その二編には、新しい時代への展望は示されず、単に古いカントリーハウス詩のテーマを繰り返して、ヘンリエッタ・マライア的美徳を型通り賞賛しているに過ぎない。彼女はかつて宮廷の華々しい主役の一人であったが、息子のチャールズ2世とも不仲であったため、王政復古時代にはすでに過去の人であった。いかに変わり身の早いウォラーであっても、彼女については、旧式のイデオロギーの枠組みに頼って賞賛の詩を書くしかなかったのだ。

結局、彼女はフランスへ帰ってしまうのであるが、彼女とカトリックとの関係を考えれば、詩人にとって彼女はある意味で、ペルソナ・ノングラータであったのだ。

チャールズ2世の後の王位継承をめぐる政治紛争をへて、トーリー党、ホイッグ党による英国の政党政治が始まると、それによって、再び大規模なカントリーハウスの建築の時代がやって来るのである。ロングリートやチャッワースの壮大さは、格別であった。ロンドンに建てられた、エドワード・ハイドのクラレンドン・ハウスは、その豪華さで衆目を集めた。

ファウラーは、カントリーハウス詩の伝統の第3期には、それ以前よりはるかに多くの詩が書かれたと述べている。それらの詩が、出版される日には、また思いもかけないスチュワート朝後期の英国の姿が現われるかもしれない18世紀の英文学において、庭や建物のimprovement「改修」という行為が、人間の、または人間のあり方や心の「改良」の表象になるまでには、解決すべき未知の問題が我々の前に横たわっている。そのためには、いま少し時間が必要であるようだ。

## 注

- 1) Graham Parry, ed., *Hollar's England: a mid-seventeenth-century view*, Michael Russell, 1980.
- 2) 水谷三公, 『近代英国の広場とエリート』(平凡社, 1989), 100-101.
- 3) *Ibid.*, 102-103.
- 4) Alastair Fowler, ed., *The Country House Poem: A Cabinet of Seventeenth Century Estate Poems and Related Items*, (Edinburgh, 1994), 193.
- 5) Tom Williamson, *Polite Landscape: Gardens and Society in Eighteenth Century England*, (John's Hopkins UP, 1995), 24.
- 6) *Loc. cit.*
- 7) David Norbrook, "Lucy Hutchinson versus Edmund Waller", *The Seventeenth Century*, Vol. XI, (1993), nos. 1, 63.
- 8) Graham Parry, *The Seventeenth Century: The Intellectual and Cultural Context of English Literature, 1603-1700*, (Longman, 1989), 110.
- 9) *Ibid.*, 21. ファウラーは、前掲書の序論において、17世紀のカントリーハウス詩の伝統を、3期に分けている。第1期は、騎士道ロマンスが、16世紀の終わり頃新しい思想をもる文学形式ではなくなった頃から、1640年頃まで、つまり内乱の始まる前夜まで、第2期は、1640年頃から王政復古まで、第3期はそれ以後ポープの時代までである。
- 10) *The Politics of Mirth: Jonson, Herrick, Milton, Marvell and the Defense of Old Pastime*, (Chicago UP, 1986), 19-20.
- 11) *Loc. cit.*
- 12) Fowler, 193-194.
- 13) Gerald M. MacLean, *Time's Witness: Historical Representation in English Poetry, 1603-1660*, (Wisconsin, 1990), 264-265.
- 14) George Plumptre, *The Garden Makers: The Great Tradition of Garden Design from 1600 to the Present Day*, (Random House, 1993), 24-25.
- 15) ビューリタン・ミニマリズム様式及びホール・バーン邸については, Timothy Mowl & Brian Earnshaw, *Architecture Without Kings: The rise of puritan classicism under Cromwell*, Manchester, 1995.
- 16) 川崎寿彦, 『森のイングランド: ロビン・フッドからチャタレー夫人まで』(平凡社, 1987)



- 年), 177–186. Fowler, 193.
- 17) Steven N. Zwicker, *Lines of Authority: Politics and English Literary Culture, 1649–1689*, (Cornell UP, 1993), 61–62.
- 18) *Ibid.*, 63–69.
- 19) A. B. Chambers, *Andrew Marvell and Edmund Waller: Seventeenth-Century Praise and Restoration Satire*, (Pennsylvania State UP, 1991), 66–67.
- 20) Mark McDayter, “‘Some Lov’d Fold of Aretine’: Genre, Intertextuality, and St James’s Park in the Late Seventeenth Century”, *The Seventeenth Century*, Vol. XI (1996), no. 2, 229–258.